

”定年後は夫婦で農業”を实践

吉田夫妻とヤギたちが繰り広げる「たんぼぼ堂」ライフ

シニアライフアドバイザー 松本すみ子（有限会社アリア）

長野県青木村。標高880mの地に、吉田良一さん（71歳）と敦子さん（66歳）夫妻のファミリーズ・ロッジ「たんぼぼ堂」はある。ヨーロッパでは「幸せを知らせる花」といわれるたんぼぼ。皆が幸せに集ってほしいという願いをこめて名づけられた「たんぼぼ堂」には、都会の喧騒とは無縁のおだやかな時が流れる。聞こえるのは川のせせらぎと鳥や虫の声。さぞ



今日もがんばって働けるように朝食をしっかりとる吉田夫妻

かし、ゆるやかなセカンドライフを楽しんでいるかと思いきや、「結構、ハードライフですよ」と良一さんは笑う。

たんぼぼ堂の堂守と自称する、良一さんと敦子さん夫婦の二人三脚人生を紹介しよう。

50歳で農業を目指し60歳で実現

青木村の一番奥に位置する「たんぼぼ堂」。車を下りると、都会の猛暑が嘘のように、ひんやりとさわやかな風に包まれた。

約束の到着時刻は3時だった。しかし、たんぼぼ堂と看板のあるロッジには誰もいない。電話をかけても通じず、人の気配もない。仕方なく、付近をぶらぶら散策し、小一時間ほどして戻ってみると、上の方から歩いてくる人の影が見えた。それが敦子さんだった。「ヤギ小屋の掃除をされていてね、

車が着いたのに気がつかなかったわ。まず、お部屋に行きましょう」。慌てた風もなく、入り口にあるロッジからちよつと登った奥の建物に案内される。メイン棟はこちらだった。ロッジは、主に食事をするためとか。敦子さんのおおらかな姿を目の当たりにして、ここでは時計にとらわれない自由な時間が流れているのだと、妙に納得した。だが、そう思ったのもつかの間。

「まず、田舎で農業をしながら暮らすには、どういうことができなないと困るかを考えたのです」（敦子さん）。住まいは横浜。都会暮らしのサラリーマンだった良一さんと専業主婦の敦子さんには、農業の知識はまったくない。そこで、良一さんの夏休みを利用し、二人揃って、就農準備校である八ヶ岳中央農業実践大学の講習に参加した。さらに、横浜で農業実習にも参加した。

この後、ゆったりとした田舎生活とは裏腹の多忙な生活を垣間見ることになる。

吉田夫妻が田舎暮らしを考えるようになったのは、良一さんが50歳の頃から。あと10年で定年を迎えるが、寿命はその後20年もある。それなら、空気のきれいな田舎で農業でもしながら、のんびりと暮らそうではないか。大手飲料メーカー勤務だった良一さんには、喘息の持病もあった。体力が残っている60歳できつぱりと会社を辞め

て、早く新しい世界を創り出した方がいい。早速、田舎暮らしに向けての準備を始める。

ヤギがもたらした新しい農業の形

「まず、田舎で農業をしながら暮らすには、どういうことができな」と困るかを考えたのです」（敦子さん）。住まいは横浜。都会暮らしのサラリーマンだった良一さんと専業主婦の敦子さんには、農業の知識はまったくない。そこで、良一さんの夏休みを利用し、二人揃って、就農準備校である八ヶ岳中央農業実践大学の講習に参加した。さらに、横浜で農業実習にも参加した。

農業を学びつつ、家探しも始めた。空気がきれいで、山があつて、水があつて、農業ができて……。さんざん探し回ったあげく、青木村と運命的な出会いをする。「忘れもしない11月3日。目に飛び込んできたのは圧倒的な山の紅葉でした。緑に囲まれ、目の前には清流もある。すぐに、ここだと決めました」（良一さん）。

とはいえ、農地を購入するにはいろいろな規制がある。農業をするためのプランを作り、利益はあ

がるか、後継者はいるかなど、もろもろの項目をクリアし、それが認められないとダメなのだ。「農業だけでは採算がとれないと考え、ファーマーズ・ロッジ（農業民宿）というスタイルを選びました」。こうして、山も含め2千坪の敷地と農家を手に入れた。購入資金は1千万円ほどだった。

98年、吉田さん夫妻は青木村に移り住み、ファーマーズ・ロッジ「たんぼぼ堂」をオープンさせた。山の斜面に広がる畑と農家を改装したロッジ。最初はそれだけだった。そのままなら、定年後のんびりした生活が可能だったかもしれない。しかし、思いがけないハードライフをもたらしたものがあつた。それが「ヤギ」だった。



たんぼぼ堂の食事専用ロッジ

今、「たんぼぼ堂」の生活はヤギを中心に回っている。朝起きたら、まずヤギの世話。水をかえて、えさをやる。小屋を掃除し、搾乳。絞ったミルクは冷蔵庫に保管し、ヨーグルトやチーズに加工する。子ヤギが生まれれば、その飼育もある。しかも、ロッジを運営しているから、宿泊客にも対応しなければならぬ。そこで、ヤギは良一さん、ロッジは敦子さんと分担することにした。

休む間もない二人。「大変なんだよ。こんな風になるとは思いもしなかった」と言いつつ、擦り寄ってくるヤギが愛おしくてたまらない。そして、なんだか楽しそうだった。ヤギがたんぼぼ堂にやってきたのは、知人の一言がきっかけだった。「あら、ここにヤギを飼った方がいいわね」。山がある、畑もある。ヤギのえさになる下草はたくさん生えている。いいアイデアではないかと良一さんは思った。そして、たんぼぼ堂オープン2年後、ついに宮崎から飛行機に乗ってヤギがやってきたのだ。

今はたんぼぼ堂に欠かせないヤギ。生活はハードになったが、ヤギからもらう恵は計り知れないと良一さんは言う。ヤギを飼い、ミルクを絞ることで、それを加工し

てチーズやヨーグルトを作ること、を思いついた。しかし、良一さんも敦子さんも、もちろんヤギやチーズ作りとは無縁だったから、農業と同じゼロからのスタートだ。牛乳からのチーズ作りを教えてくれるところはあっても、ヤギのチーズづくりは聞いたことがない。そこで、牛のチーズの基礎を覚えて、ヤギのチーズ作りにとりかかった。試行錯誤の連続だったが、たんぼぼ堂流という良一さんのチーズ作り手法が固まった。

それが次第に評判になって、全国から注文が来る。ヤギのチーズ作りを学びたいという研修生も受け入れるようになった。「アフリカからも研修に来ますよ。モリリクニアでは、日本に行ったら青木村のたんぼぼ堂へ行けて言われているらしい（笑）。ブラジルの日系人も来ましたしね」（敦子さん）。横浜に住んでいたなら、こんな



チーズ小屋の看板がカワイイ



ヤギの乳絞りは毎朝欠かせないと言う良一さん

交流は生まれなかった。ヤギとチーズがもたらす国際交流。敦子さんは、そんな生活を送れるのは楽しいと言う。そして、良一さんは「チーズ作りには終わりがありません」と語る。それもまた嬉しそうだった。

地場の食材が豊富な 手料理も自慢

豊かな自然とヤギの恵を堪能できるたんぼぼ堂。しかし、ここで楽しみはそれだけではない。地場の農産物を豊富に使った敦子さんの手料理も、お客さんにとってはお目当ての一つだ。「なるべく地のものを使うようにしているんです」と敦子さん。

良一さんは「うちには献立表がないんですよ。なぜなら、奥さんがファイリングで作るから」と笑う。ファイリングという表現には、そのとき手に入った素材が最もお



チーズの熟成度を見るのも大事な仕事

いしく食べられる料理を作るとい
う意味が含まれている。

夕食に出てきたのは、自家製の
生チーズを使った前菜、庭で摘ん
できたヤブカンゾウのおひたし、
ヤギ肉のロースト。茹でたてのじ
やがいもと天ぷらにしたモロッコ
インゲン近所からはおすそ分け。

「近所にはヤギの堆肥をあげるん
です。そうすると、その堆肥で育て
た野菜をくださる。物々交換で安
全な有機野菜が食べられるんです」。

このヤギを中心にした循環型農
業こそ、吉田さん夫婦が目指す農
業の形なのだ。だから、良一さん
にはまだまだやりたいことが山積
みしている。今は小屋で飼ってい
るヤギを放牧して飼育する。ヤギ
アイスクリームやヤギケーキ、ヤ

ギハムなど肉の加工品を研究する。
夢はふくらむばかりだ。

「中山間地で農業者が生きられ
るような方向づけができればと思
っています。理想は、手間隙かけ
ず、年寄りでもできるような方法

田舎暮らしで何をしますか？

定年後、田舎でのんびり暮らし
たいと思う人は多いようだ。特に、
なぜか男性がそう希望する。

そういうリタイア世代の気持ち
と、人口流出や地域振興策に頭を
かかえる地方の思惑が一致して、
各自治体が主催する「田舎暮らし
セミナー」が首都圏や大都市でさ
かんに開催されている。実際に現
地に短期間滞在して、住民と交流
をはかる体験ツアーもある。

また、企業や自治体が手を組ん
だ「移住・交流推進機構（JON
N）」が活動を開始し、移住・定
住を促進する「ふるさと回帰支援
センター」というNPOも生まれ
た。年に一度開催のイベント「国
内デュアルライフフェア」は大勢
の来場者で賑わっている。

しかし、どれほどの人が、その
思いを実現することができたのだ
ろう。結局、無理だとあきらめた

を確立すること」と良一さん。

苦労は？と訊ねると、「それは
ど意識したことはないですね」と
いう返事。敦子さんも「たいした
ことをしてやるわけでもないん
ですけど」と笑う。吉田夫妻やヤギ

人の方が多くではないか。

経済的な問題、今まで暮らして
いた地域への愛着、田舎暮らしへ
の不安、家族の懸念や反対、しが
らみ……。なかでも、よくいわれ
るのは妻の反対である。子供など
を通じて、地域に根ざした交友関
係を確立している妻は、それを捨
ててまで、見ず知らずの土地に移
りたいとは思わない。

吉田夫妻の場合、子供や友人は
引き止めたそうだが、少なくとも
妻の反対はなかった。むしろ、敦
子さんが積極的な後押し役を演
じたように見える。現役時代に
は猛烈サラリーマンとして鳴ら
した夫。その夫が50歳になったと
た、第2の人生を真剣に模索する
のはなぜか。そこに、今までと同
じような環境でのリタイア生活で
は決して満足できないというブラ
イドのようなものを感じたからで

ちどの一夜は、昼間の忙しさが嘘
のようなのんびりした暖かな気分
に包まれた。

■ たんぽぽ堂

<http://www.tanpopo.com/>

(取材協力：杉野治子)

はないだろうか。「たんぽぽ堂」
成功の要因は、妻を最大の協力者
にできたことだ。

もう一つ、田舎暮らしで大事な
ことは、そこで暮らすための目的
を見つけていることができるかどう
かである。田舎で「何を」して「暮ら
すのか。真っ先に思い浮かぶのは
農作業だろうか。「野菜でも作っ
て、そこそ自分給自足できればい
い」。その程度なら、今や、都心
の家庭菜園でもできる。

良一さんの考えも最初はファー
マーズロッジの経営と畑仕事だっ
た。しかし、持ち前の好奇心は、
それだけでは満たされなかった。
さらに何かを求めていたときに、
ヤギが現れ、ピンときたのだ。ヤ
ギの飼育に汗を流し、チーズやヨ
ーグルトを生産し、それが少な
らず世間に認められる。良一さん
が目指したのは、そうした「生き
がい」であって、誰からも忘れ
られたような田舎の隠居暮らしで
はなかったのである。